

## R. オドナーの「スミス価値尺度論」解釈 (I)

中 川 栄 治\*

### 序

ローリー・オドナー (Rory O'Donnell) は、「アダム・スミス (Adam Smith) の価値尺度論」研究の近年の傾向を、スミスの労働支配力尺度 (labour command measure) を厚生 (welfare) の測定を企図された購買力の一指標 (index) とみなし、以前の評釈者たちが多くの注意を払った「支配労働 (labour commanded)」と「体化労働 (labour embodied)」との関係を、スミスの思想中では重要な役割を演じてはいなかったとして退ける、といったものであるとみる。そしてそのような傾向に対し、価値尺度についての議論におけるスミスの主要関心事は、生産方法 (method of production) の変化によってもたらされる諸商品の相対価値 (relative value) の変化ということであったのであり、したがってまた、「我々がいついかなるころでも様々な商品の価値を比較することのできる」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited, with an Introduction, Notes, Marginal Summary and an Enlarged Index by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, New York: Random House, 1937——以下、WN と略記する<sup>(1)</sup>——, p. 36. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年 [1789年の『国富論』原著第5版 (3巻本) を底本とした邦訳] ——以下、大河内訳と略記するとともに巻数を〈I〉, 〈II〉, 〈III〉と略記する, ただし, 本稿および次稿以下で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——〈I〉, 63頁) 標準 (standard) を見つけ出すことがスミスの意図であった, という認識に立ちつつ, 彼の著者 Rory O'Donnell, *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke & London: Macmillan, 1990——以下, O'Donnell [1990] と略記する——の第1部第5章「価値の尺度 (The Measure of Value)」において, スミスの価値尺度についての新し

---

\* 広島経済大学経済学部教授

い解釈の提示、伝統的諸解釈の不十分さの論証をなそうとする<sup>(2)</sup>。

本稿は、主にその第1部第5章での議論に焦点を当てつつ、筆者なりの方法で、そのようなものとしてのオドーネルの所論の内容およびその特徴等を明らかにしようとするものである。

なお、本誌での紙面の関係上、その試みは、本稿を含め数回に分けて行われる。

(注)

(1) なお、本稿および次稿以下で取り扱うオドーネルの著書中で使用されている『国富論』の原典は、グラスゴウ版『国富論』, Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, general eds.: R.H. Campbell and A.S. Skinner, textual ed.: W.B. Todd, 2 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1976) であるが、本稿および次稿以下においては、前掲のモダン・ライブラリー版を使用し、オドーネルが指示している『国富論』中の箇所についても、それに対応するモダン・ライブラリー版中の箇所で示し、必要に応じて説明等を付することとする。

(2) 以上の点については O'Donnell [1990], pp. 62-63 参照。

## I 『国富論』第1篇第5章：前資本主義経済と資本主義経済

まず、オドーネルによれば、スミスは『国富論』第1篇第5章において、第4章の終わりのほうの箇所で示した諸課題の一つ、「交換価値 (exchangeable value) の真の尺度はなんであるか、すなわち、すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか」(WN, p. 28. 大河内訳〈I〉, 50頁) を明らかにするという課題を扱ったのであるが、その第5章での議論のうち、初めのほうの部分は前資本主義経済 (pre-capitalist economy) に関連し、残りの部分は資本主義経済に関連する、とみられる<sup>(3)</sup>。そして、スミスが最初に労働を、「商品の交換価値の真の尺度」として定義したのは (そしてこれを、「真実価格 (real price)」, 「真の値打ち (real worth)」, 「最初の代価 (first price)」, 「本来の購買貨幣 (original purchase money)」と等置したのは) 第5章の最初の三つのパラグラフにおいてであり、他方、スミスが労働支配力尺度の論理を指し示したのは後のほうの諸パラグラフにおいて、そしてスミスがその尺度を実際に適用したのは資本主義経済にたいして、であった、とされる<sup>(4)</sup>。

(注)

(3) オドーネルは、この点は多くの注釈者の認めるところであるとする (O'Donnell [1990], p. 63 を見よ)。なお、そのような点を認めているものとしてオドーネルが挙げる文献例 (それらの文献そのもののほとんどは、中川栄治著『「アダム・スミスの価値尺度論」に関

する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——』（上・下）（広島経済大学研究双書，第14冊，第15冊）（広島経済大学地域経済研究所，1995年）——以下，中川 [1995] と略記する——中でも取り扱われている）については，O'Donnell [1990]，p. 236n. 1 を見よ。

(4) 以上の点については O'Donnell [1990]，pp. 63-64 参照。

## Ⅱ 『国富論』第1篇第5章第1パラグラフから第3パラグラフおよび第4パラグラフから第7パラグラフ：前資本主義経済

そしてオドナーは、『国富論』第1編第5章の初めのほうの諸パラグラフでのスミスの議論に関してつぎのような内容の見方を示す。すなわち，オドナーによれば，スミスはそれらのパラグラフにおいて，実際上は生産性（productivity）の一尺度であった「真実価格（real price）」の定義を採択したのであり，そしてその定義とは，第2パラグラフ冒頭の「あらゆる物の真実価格，すなわち，あらゆる物がそれを獲得しようとする人にたいして真に費やさせる（cost）ものは，それを獲得するための労苦（toil）と骨折（trouble）である」（WN, p. 30. 大河内訳〈Ⅰ〉，52頁）といったものであった，とされ<sup>(5)</sup>，また，そこでは「体化された労働（labour embodied, 体化労働）」と「支配される労働（labour commanded, 支配労働）」との両方のことが言われている——あるいはより正確には，第5章のこの段階ではスミスは一商品の生産に費やされた（expended）労働の量と一商品が購買または支配しうる財貨のなかに体化された（embodied）労働の量との間に区別をなしていなかった——とされるとともに，前資本主義的交換経済においてはそれら二つの労働量は等しくなる，とされるのである<sup>(6)</sup>。

つづいてオドナーは，第5章第4パラグラフから第6パラグラフでスミスはまた，幾つかの理由のために労働は普通，価値尺度としては使用されないということ指摘するとともに，第7パラグラフの初めの部分で，価値尺度として使用されるものとしての金銀はその生産に使用される（used）労働量における変化のゆえに，その価値において変動し，そしてそれ自身の価値においてたえず変動している商品は他の諸商品の価値の正確な尺度では決してありえない，としたあと，それ自身の価値がたえず変動することのない商品を見つけ出すという問題にアプローチしようとした，とする<sup>(7)</sup>。そしてその際オドナーは，スミスはその問題に事実上二つの道筋でアプローチした，とみ<sup>(8)</sup>，その第一の道筋は第7パラグラフ中に示されているつぎのようなものであったと捉えようとする。

すなわち，オドナーによれば，まずスミスは，生産を労働者の観点（the point

of view of the worker) から考え、そして、労働時間 (labour time) は実際に、生産の困難さの良好な尺度 (measure) であることを主張し、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう。……彼が支払う代価 (price) は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。……変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 57-58頁) と述べるのであるが、スミスはここで、価値の尺度 (measure) としてあるいは諸商品の「真実価格 (real price)」として、労働を選択することを正当化するための、不変性 (constancy) についての最初の陳述をなし、そしてそのことから、「時と場所のいかんを問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは、高価である」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58頁) と推論し、さらにその結果として、「それゆえ、それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準 (standard) である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58頁) という形で、価値尺度としての労働の選択を明言した、とみられるのである。(そしてまた、オドーネルによれば、この段階では、体化された労働と支配される労働との区別はなされていなかったけれども、ここでみてきたようなスミスの文言は、生産に費やされる (expended) 不変な量の労働は不変な量の価値を創造するということを述べているものとして理解することができる、ともされる。)<sup>(9)</sup>

(注)

- (5) オドーネルに先立ち、例えば V.W. ブレイドゥンは、1938年の論文 V[incent] W. Bladen, "Adam Smith on Value," in *Essays in Political Economy in Honour of E.J. Urwick*, ed. H.A. Innis (Toronto: University of Toronto Press, 1938), pp. 27-43——以下、Bladen [1938] と略記する——で、スミスは事物の「真実価格 (real price)」を「それを獲得するための労苦と骨折りと定義するのであるがそれは事実上、生産性と表裏の関係にあるもの (そして、概念的には、交換価値とは別のもの) であったのであり、スミスは事物の「真実価格」の経時的変化の測定ということによって事実上、当該事物の生産における生産性の経時的変化の測定といったことを考えようとしていたのであって、『国富論』第1篇第5章でスミスが「労働に対する支配力」指標等を論じた際の主要関心事はそのようなものとしての生産性の経時的変化の測定、そのための指標等ということであった、といった認識に基づきつつ議論を展開し、さらに、それから36年後の1974年の著書 Vincent W. Bladen, *From Adam Smith to Maynard Keynes: The Heritage of Political Economy* (Toronto & Buffalo: University of Toronto Press, 1974) ——以下、Bladen [1974] と略

記する——、また初出1975年の論文 V[incent] W. Bladen, “Command over Labour: A Study in Misinterpretation,” in *Adam Smith: Critical Assessments*, ed. John Cunningham Wood, 4 vols. (London & Canberra: Croom Helm, 1983–1984), vol. 3, pp. 363–376 [Source: *Canadian Journal of Economics*, vol. 8 (no. 4, November–December 1975), pp. 504–519] ——以下、上掲書中の上掲論文を Bladen [1975] と略記する——の各々においても、うえのような認識に基づく議論を展開していた。(それについては、中川 [1995], (上), 「20」, (下), 「54」, 「58」を見よ。)

それにたいしオドナーは、スミスの言う「真実価格」を実際には生産性の一尺度 (measure) と捉えつつ、しかも、本稿「序」で触れたように、価格尺度についての議論におけるスミスの主要関心事そのものは、生産方法の変化によってもたらされる諸商品の相対価値の変化ということであった、とみるのであり、またそこでのスミスの意図は、技術変化 (technical change) の一結果としての諸商品の变化する価値 (相対価値としての価値) ということを研究するための尺度を見つけ出すということであった、とするのであって (例えば、O'Donnell [1990], pp. 62, 64, 69 を見よ。また、オドナーは以下のような表現の仕方もとっている。例えば、スミスの労働支配力価値尺度は、生産方法の諸変化によってもたらされる諸商品の価値の諸変化の研究という目的のために設計されていた。スミスの労働支配力価値尺度は、生産方法の変化に帰因する価格 (price) 変化を測定するために設計されていた。スミスの労働支配力尺度は、生産方法における諸変化による価値の諸変化を測定するために考案された。スミスの価値尺度は、生産方法における諸変化に帰因する価値の諸変化を測定するよう設計されていた、等々といったものである。例えば、O'Donnell [1990], pp. 80, 102, 212, 216 を見よ), 『国富論』第1篇第5章でスミスが「労働支配力尺度」等を論じる際の問題はうえのようなことにかかわる問題であった、とみるのである。

なお、P. シロスーラビーニは、1976年の論文 P[aolo] Sylos-Labini, “Competition: The Product Markets,” in *The Market and the State: Essays in Honour of Adam Smith*, ed. Thomas Wilson and Andrew S. Skinner (Oxford: Clarendon Press, 1976), pp. 200–232 ——以下、Sylos-Labini [1976] と略記する——のなかで、うえのオドナーの見方にきわめて近い見方を示していた。すなわち、シロスーラビーニによれば、スミスは主に、異なった諸時点および諸場所における異なった諸商品の価値にたいして技術変化 (technological change, changes in technology) がもたらす諸帰結を分析することに関心を抱いていたのであり、そしてまた諸商品の諸相対価格 (relative prices) にたいして技術進歩 (technological progress) がもたらす諸帰結を研究することを意図していたがゆえにスミスは異時点間の比較に使用される標準 (standard) を必要とした、とみられ、スミスの議論においては「支配される労働 (labour commanded, 支配労働)」という標準は、そのような「技術変化」(「技術進歩」) の存否およびその程度を反映した形で「価値」(相対価格) の大きさを表示するような価値 (相対価格) 標準として構想されていた、と捉えられるのであった (例えば、Sylos-Labini [1976], pp. 201–202, 206, 212, 中川 [1995], (下), 572頁, 573–574頁, 586–589頁注(3)–注(6), 608–612頁を見よ)。(ただし、シロスーラビーニによればさらに、例えば、スミスはまたその「支配労働」という標準を、付随的にはあるが、一経済の総産出としての「年々の生産物 (annual produce)」の大きさおよびその経時的な動きを測定するために用いようとした、ともみられるのであった。この点については、Sylos-Labini [1976], pp. 213ff, 中川 [1995], (下), 581頁以下, 616頁以下を見よ。)

- (6) また、この脈絡で、第5章第2パラグラフ中の「貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである」の部分から「そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである」の部分までが、一部省略されつつ、引用される。以上の点については O'Donnell [1990], p. 64 参照。
- (7) O'Donnell [1990], p. 64 参照。
- (8) O'Donnell [1990], p. 64 参照。
- (9) 以上の点については O'Donnell [1990], pp. 64-65 参照。

### Ⅲ 『国富論』第1篇第5章第8パラグラフ以下：資本主義経済

さて、うえのように、オドーネルは、スミスはまず、生産を労働者の観点から考えてうえのような第一の道筋で価値尺度としての労働という主張をなそうとしたとみるのであるが、オドーネルによればまた、スミスはそれにつづいて、労働者の観点からでなく、労働を雇う (hire) 人々が見た場合の諸商品と労働との交換という観点から価値尺度を考えるとといった第二の道筋へ移ろうとしたのであり、またその際スミスは、「真実価格 (real price)」という用語の意味を、「労苦と骨折り」の量を指すものから、労働と交換に与えられる生活の必需品と便益品のある所与の量を指すものへと拡張しようとし、しかもそこでは事実上、労働時間の量によって測定されるものとしての「真実価格」と「労働者の生活資料 (subsistence of the labourer)」の量によって測定されるものとしての「真実価格」とをおおよそ同意義のものにしてしまう効果をもつ一群の仮定がなされていた、とみられる<sup>(10)</sup>。

すなわち、スミスは、うえのように第7パラグラフ中で、労働は価値の究極で真の標準であることを主張したのち、第8パラグラフで、第7パラグラフ中での文言と矛盾しない形で、「しかしながら、等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値をもつものではあるが、労働者を雇用 (employ) する者にとっては、比較的大きい価値をもつようにみえることもあれば、比較的小さい価値をもつようにみえることもある。雇い主は等量の労働を、あるときには比較的多量の、またあるときには比較的小量の財貨で買うのであって、雇い主にとっては、労働の価格は、他のすべての物の価格と同じように変動するかのようと思われる。それは、前者の場合には彼にとって高価にみえ、後者の場合には安価にみえる。けれども実は、財貨が、前者の場合に安価であり、後者の場合に高価であるのである」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58頁)と述べたうえで、それにつづく第9パラグラフ、および第10パラグラフの初めの部分で、「それゆえ、こうした世間一般に流布している意味に

においては (in this popular sense), 労働も諸商品と同じように、真実価格と名目価格をもっているといえよう。労働の真実価格は、労働と交換に与えられる生活の必需品と便益品の量にあり、その名目価格は、労働と交換に与えられる貨幣の量にある、と言ってよい。労働者が富んでいるか貧しいか、その報酬がよいかわるいかは、彼の労働の真実価格に比例しているのであって、その名目価格に比例しているのではない。／諸商品と労働について、その真実価格と名目価格とを区別するのは、たんなる思索の問題ではなくて、ときには実際上かなり有用な問題かもしれない。同一の真実価格はつねに同じ価値をもつ (the same real price is always of the same value), しかし金銀の価値の変動のゆえに、同一の名目価格は時として、非常に違った価値をもつのである」(WN, p. 33. 大河内訳〈I〉, 58-59頁。／は原典において行変えが行われていることを示す)と述べるのである。そしてスミスは、諸商品と労働の「真実価格」のこの「世間一般に流布している (popular)」考えを、練り上げ、使用しようとしたのである。とくに、スミスがすべての他の諸商品の真実価格の尺度として採択したのは、労働の真実価格についてのこの考えであったのであり、例えば第15パラグラフ中 (WN, p. 35. 大河内訳〈I〉, 61頁)で明示的に示されているように、スミスは、労働の真実価格という用語によって、「労働者の生活資料」を意味しようとしていたのである。そして、第7パラグラフ中の「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」という当初の言説と、第10パラグラフ中の「同一の真実価格〔オドーネルによれば、労働者の生活資料〕はつねに同じ価値をもつ」という言説との間には、一見したところ、矛盾が存在するかのように見えるかもしれないが、スミスはそこでは事実上、不変性についてのこれら二つの言説を矛盾のないものにしてしまう諸仮定の基礎のうえで、彼の価値尺度を練り上げ、使用していたのであった、つまり、うえの前者の言説ではスミスは、労働時間が、労苦と骨折りのあるいは生産の困難性の、一つの良好な尺度であると考えていたのであるが、スミスはまた、事実上彼がなしていた仮定をもって「同一の真実価格〔労働者の生活資料〕はつねに同じ価値をもつ」という後者の言説を基礎づけることによって、労働時間の量によって表現されるものとしての価値と生活資料の量によって表現されるものとしての価値とが同意義のものとなると考えようとしていた、というわけである。<sup>(11)</sup>

そしてオドーネルによれば、その仮定の一つは、『国富論』第1篇第5章第15パラグラフ (WN, pp. 35-36. 大河内訳〈I〉, 61-62頁)中にみられるような、普通労働の穀物賃金 (corn wage of common labour) は長い諸期間 (long periods of time) にわたって一定であるといったもの、もう一つの仮定は、第1篇第11章の

「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」, 「第1期」第28パラグラフ (WN, pp. 186-187. 大河内訳〈I〉, 309頁) 中にみられるような, 穀物は費用不変に近い費用で (at near constant cost) 生産されるといったものである, とされる。そしてまた, それら二つの仮定は, スミスをして, 穀物価格 (price of corn) を価値の一標準として, 労働の価格 (price of labour) の一代理物 (proxy) として, 使用することを可能にただけでなく, そもそも労働尺度の使用にたいする一つの合理的基礎を提供したのである, ともされる<sup>(12)</sup>。

スミスはうえのような「労働者の観点」から「労働を雇う人々の観点」への転換を意識的になしているのであり, また, 労働時間の量によって表現されるものとしての「労苦と骨折り」の量という「真実価格」概念を放棄して生活資料の量によって表現されるものとしての「真実価格」概念を採ったわけでも, それら両概念の間で混乱していたわけでもなく, むしろ, うえのような仮定を設定することによってそれら両概念を矛盾することのないものとして捉えようとしているのである, とオドーネルはみようとするのである。うえのような点との関連でスミスの議論における一貫性の欠如, 矛盾, 混乱等々といった指摘をなす評釈が存在してきたのに対し, オドーネルは, そこでのスミスの議論を, 論理の一貫した内容をもつものとして把握しようとするわけである<sup>(13)</sup>。

なお, うえのようにオドーネルのみるところによれば, 普通労働の穀物賃金は長い諸期間にわたって一定, および, 穀物の生産費はほぼ一定という二つの仮定は, 価値尺度に関するスミスの議論においてきわめて重要な役割を演じているということになるわけであるが, オドーネルによればまた, スミスによるそれらの仮定の採択がはっきりと示されている『国富論』第1篇第5章第15パラグラフおよび第11章の「余論」, 「第1期」第28パラグラフそのものはまた, 価値へのスミスの関心はもっぱら, 生産方法の変化に帰因する価値の変化ということに関するものであったということを確認する, とされ, さらに, それらの箇所は, 貨幣価格を変化させる様々な力が作用する期間 (time periods) の性質についてのスミスの見解をも説明する, ともされる。すなわち, シロスーラビーニが示しているようにスミスは, 短期 (short run) と長期 (long run) との間だけでなく, 長期と, 「発展段階 (stage of development)」もしくは「状態 (condition)」との間にも, 区別をなしたのであり<sup>(14)</sup>, スミスの議論においては, ある所与の発展段階内では, 生産方法が変化するかもしれない, またそれゆえそれは相対的自然価格 (relative natural prices) を変化させるかもしれないのであるが, 賃金, 利潤および地代が変化するのは, 一つの「発展段階」もしくは「状態」からもう一つの「発展段階」もしくは「状態」への移行

においてのみ<sup>(16)</sup>、ということになっている<sup>(17)</sup>、とされるのである<sup>(18)</sup>。

そしてオドーネルは、うえのような認識に基づきつつ、うえの二つの仮定に関連してさらに補足、説明を加えようとする。

(注)

(10) O'Donnell [1990], p. 65 参照。

(11) O'Donnell [1990], pp. 66-67 参照。

(12) O'Donnell [1990], p. 67 参照。

(13) また、オドーネルは、スミスの議論におけるうえのような「労働者の観点」と「労働を雇う人々の観点」あるいはまたうえのような二つの「真実価格」概念といったことに言及しつつもこのような解釈をとってこなかった文献例を挙げようとする（そこで挙げられている文献そのものは、中川 [1995] 中でも取り扱われている）。このことを含め以上の点については、O'Donnell [1990], p. 236nn. 2, 3 を見よ。（なお、価値尺度に関するスミスの議論における「労働者の観点」と「雇い主の観点」およびそれに関連する諸事項ということは、オドーネルの挙げる文献例に含まれていない例えば R.A. マクドナルド (R.A. Macdonald) の1912年の論文, C.M. ウォルシュ (C.M. Walsh) の1926年の著書中でも取り上げられていたのであるが——それについては中川 [1995], (上), 「11」および「12」を見よ——、オドーネルの見方は、それらにみられる見方とも異なる。）

(14) ただし、オドーネルによれば、「労働者の観点」から「労働を雇う人々の観点」へとといった見方の転換そのものは、スミスは価値の「源泉 (source)」と「尺度 (measure)」とを混同しそして「体化された労働」と「支配される労働」とを混同したといった解釈を引き起こすもとなっていたように思える、ともされる (O'Donnell [1990], p. 65 参照)。

(15) オドーネルは、シロスーラビーニがそのようなことを示している箇所として Sylos-Labini [1976], p. 202 をあげる。その点に関するシロスーラビーニの所説については、中川 [1995], (下), 573-574頁, 586頁注(3), 608-609頁を見よ。

(16) オドーネルは、『国富論』第1篇第7章第34パラグラフおよび第8章第27パラグラフ (WN, pp. 63, 73-74, 大河内訳〈I〉, 107頁, 124頁) を見るよう指示する。

(17) なお、このようなことに関連するシロスーラビーニの見方については、Sylos-Labini [1976], pp. 201-206, 中川 [1995], (下), 572-575頁, 586-589頁注(2)-注(8), 608-612頁を見よ。なおまた、そこではシロスーラビーニは事実上、スミスの議論においては、技術変化だけでなく賃金、利潤、地代の「自然」率（それらの各々の、「競争」のもとで成立する率）にも変化が生じうるのは一つの発展段階からそれにつづく別の発展段階に移行する際にあり、それに対し、一発展段階内、長期のある期間からそれにつづく長期の別の一期間のあいだでは技術変化は生じうるが賃金、利潤、地代の「自然率」そのものは一定、ということになっている、と捉えるとともに、スミスの議論においては「賃金」、「利潤」、「地代」の各々の自然率、またある発展段階からそれにつづく別の発展段階に移行する際に生じうるそれらの自然率各々の変化の率そのものは、究極的には、厳密に経済的な諸力というよりもむしろ社会の一般的状態またその変化というものによって与件として独立的に与えられるもの、ということになっている、ともする。（スミスの議論における「賃金」、「利潤」、「地代」の「自然率」の動きということについてのシロスーラビーニの捉え方といったことを含めて、以上の点に関する詳細については、うえにあげた箇所のうち Sylos-Labini [1976], pp. 202-204, 中川 [1995], (下), 573-574頁, 586-589頁注(3)-注(7),

608-609頁を見よ。)

- (18) 以上の点については O'Donnell [1990], p. 67 参照。ただし、オドーネルによればまた、スミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際の基本的な特徴は、一般に賃金率と利潤率とが所与とされているということであった、とされる (O'Donnell [1976], p. 70 を見よ)。

#### IV 穀物賃金一定の仮定および穀物生産費一定の仮定に関連して

まず、オドーネルは、穀物賃金一定という仮定に関連してつぎのような内容の説明、補足を加えようとする。すなわち、スミスは、穀物賃金一定という仮定から、「それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値により近い〔more nearly, ただしオドーネルの引用文では more clearly〕ものをもってゐる。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを購買または支配することができるであろう」(WN, p. 35. 大河内訳〈I〉, 61頁。〔 〕内は中川)ということ推論したのであり、そしてまた、そのこと自体は穀物賃金の変化ということを除外してしまうかのようにみえるかもしれないが実際にはそうではなく、スミスの議論では事実上、金銀あるいは(穀物を除く)他のいかなる商品の価格もそれらのものの生産方法の諸変化ということに帰因して変化するかもしれないが、穀物賃金<sup>(19)</sup>が変化するのは、一つの「発展段階」もしくは「状態」からもう一つの「発展段階」もしくは「状態」に移行するときのみ、ということになっている、というわけである。<sup>(20)</sup>

つぎに、穀物生産費一定という仮定に関連してオドーネルが加える補足、説明はつぎのようなものとして捉えることができる。すなわち、スミスはうえのような考えを示す『国富論』第1篇第5章第15パラグラフにつづく第16パラグラフ(WN, p. 36. 大河内訳〈I〉, 62-63頁)において、穀物の貨幣価格は穀物と銀との相対的な生産方法(relative methods of production)ということによって決定(determine)されることを明らかにするとともに、穀物生産費一定という仮定についての遠回しの言及をなすのであるが、第1篇第11章の「余論」, 「第1期」第28パラグラフ(WN, pp. 186-187. 大河内訳〈I〉, 309頁)中で、「そのうえ改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働、同じことであるが、ほぼ等量の労働の価格を必要とするであろう。というのは、耕作が進展しつつある状態での労働生産力(productive powers of labour)の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜(cattle)の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである。それゆえ、我々は、以上すべての理由から、い

かなる社会状態、いかなる改良の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる土地の原生産物よりも、いっそうよく等量の労働を代表し、また等量の労働に対応することになるであろうということを安んじて確信してよいだろう。したがってすでに述べたように、穀物は、富と改良のすべての段階において、他のどんな商品、どんな商品群よりも正確な価値の尺度なのである。それだからこそ、我々はあらゆる段階における銀の真の価値 (real value) は、それを穀物と比較することによってのほうが、他のどんな商品または商品群と比較することによってよりも、よく判断することができるのである」と述べている。スミスはこの「余論」において彼の労働支配力価値尺度あるいは穀物価値尺度 (labour command or corn measure of value) を使用するのであるが、スミスはうへの文言において、穀物の生産費一定という仮定を明示的なものにし、さらに、穀物賃金一定という仮定と同様穀物生産費一定という仮定も、彼の価値尺度がうち立てられる際の基礎となっているということを明示しているのである。また、スミスのその文言は、穀物生産費一定という彼の仮定を例証するのみならず、つぎのことをも示している。すなわち、スミスの議論では、家畜の価格 (price) の上昇はうへのような役割を果たすのであり、したがってそこでは、穀物は不変の労働量 (リカードウ (D. Ricardo) の場合のような「直接 (direct)」労働プラス「間接 (indirect)」労働という意味での) によって生産されると仮定されていたのではない、ということである。スミスの労働支配力尺度 (labour command measure) は、穀物生産におけるおおよそ一定の貨幣費用 (approximately constant money cost) というに基づいているのであって、穀物に体化される (embodied) 労働の不変性ということに基づいているのではないのである。<sup>(21)</sup>

そしてまた、スミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際の基本的特徴は、一般に賃金率と利潤率が所与とされているということであった、とみるとともに資本主義経済に関するスミスの価格体系を一つの生産価格体系 (production price system) とみるオドーネルは事実上、<sup>(22)</sup>スミスの議論においては、穀物の価格も他のすべての商品の価格と同様、生産費によって決定されるのであるが穀物の生産費は (おおよそ) 一定と仮定されているのであり、そこでは穀物生産費一定というその仮定はまた、穀物価格一定 (constant price of corn) という仮定を意味する、<sup>(23)</sup>とも捉えるのである。

(注)

(19) オドーネルは、スミスがこのような考えを示している箇所として、いま本文でみた文言

を含む『国富論』第1篇第5章第15パラグラフ (WN, pp. 35–36. 大河内訳〈I〉, 61–62頁) をあげる。

(20) O'Donnell [1990], p. 67 参照。

(21) O'Donnell [1990], pp. 68–69 参照。なお、本稿注(5)中でみたように、シロスーラビーニは、スミスが彼の価値尺度によってなそうとしたこと等に関してオドーネルの見方にきわめて近い見方を示していたのであるが、そのシロスーラビーニの場合にも、スミスは穀物生産の費用ほぼ一定を仮定していたとされる。しかしまたその際、その費用としては、事実上、穀物生産において穀物単位数量当たり直接的あるいは間接的にかかわることになる労働の量のことが考えられており、そしてそのようなものとしての労働の量がほぼ一定という意味で、ほぼ穀物の単位数量当たり費用一定ということが考えられていた。すなわち、シロスーラビーニは、いま本文中で触れた『国富論』第1篇第11章の「余論」, 「第1期」第28パラグラフと、それに先立つ第27パラグラフ (WN, p. 186. 大河内訳〈I〉, 308–309頁) とのかかわりから、事実上、つぎのような内容の見方を示そうとしていたのであった。つまり、スミスの場合、初期の時代にあつては広大な面積の「未耕の荒地」の存在のゆえに家畜はほとんど自由財であるが、その後、「未耕の荒地」が不十分なものとなり、そして家畜は、通増的な度合いで、労働によって飼育されなければならない、ということになっている。そして、このように穀物の生産に必要な「農業の主要な用具」である家畜は、労働によって飼育されなければならない度合いが通増していくことになっているスミスの議論では、一方での労働の生産力の向上、他方での穀物生産活動の一環としての家畜飼育のための労働量の通増ということから、結局のところ、穀物生産において穀物の単位数量当たり直接的あるいは間接的にかかわることになる労働の量はほぼ一定、その意味で、一方での労働の生産力向上による費用通減傾向と、他方での「農業の主要な用具」である家畜との関連での費用通増傾向という二つの対照的な力の帰結として、穀物の単位数量当たり費用ほぼ一定、穀物生産ではほぼ費用一定、ということになる、というわけである (なお、シロスーラビーニによればまた、スミスの場合には、穀物の相対的に高い輸送費——金銀の場合よりもかなり高い——ということが、異なる国々をある程度孤立させることとなっているのであって、そのような事情もまた、スミスをして、穀物の費用に影響を及ぼすうえの二つの対照的な力はあらゆる「発展段階」において相殺し合う傾向をもつということを主張するのを可能にすることにあずかっている、ともされる)。(以上の点の詳細については、Sylos-Labini [1976], pp. 209–210, p. 209nn. 7, 8, 中川 [1995], (下), 580頁, 598–599頁注(28)–注(32), 613–614頁を見よ。)

(22) 本稿注(18)および O'Donnell [1990], p. 238n. 10 参照。

(23) O'Donnell [1990], pp. 236–237nn. 4, 5 参照。なお、言うまでもなく、そこでは、利潤率所与 (利潤率一定) のもとでの穀物生産費一定ということによる穀物価格一定、ということが考えられているわけであろう。

## V 数字例

オドーネルは、スミスの意図は技術変化の一結果としての諸商品の变化する価値ということを研究するための尺度 (measure) を見つけ出すことであったのであるが、スミスは価値の標準 (standard) として、普通労働の貨幣賃金を採択したので

あり、そしてそのさい穀物賃金および穀物の生産条件に関するうへの仮定が、一商品の労働支配力価値における変化を、その商品の生産に要する労働および他の諸投入物の変化（生産条件の変化、技術変化）の一つのおおよその指標 (indicator) として使用することを可能にしているのだ、とみる<sup>(24)</sup>。そしてオドナーは、スミスのその労働支配力尺度が実際にそのような機能を果たしうることを具体的に説明しようとする。

その際、オドナーは、「製造品 (manufactured commodity)」の場合について表-1のような数字例を示しつつその説明をなそうとするのであるが、その内容は以下のようなものである<sup>(25)</sup>。

表-1 製造品

	労働投入	貨幣賃金	原料投入	原料価格	費用	利潤率%	価格	労働支配力
期1	2	5	4	10	50	100	100	20
期2	1	5	2	10	25	100	50	10

(出典：O'Donnell [1990], p. 69.)

①ここでは、生産技術の改良によって必要労働投入 (input) と必要原料投入との両方が半分になっている製造品を考える (この表では、労働投入が2から1へ、原料投入が4から2へ)<sup>(26)</sup>。②穀物生産費不変と貨幣価値不変を所与とすれば、穀物賃金一定ということは、貨幣賃金一定 (この表では5) ということを含意する<sup>(27)</sup>。③原料投入物価格も不変と仮定する (この表では10) (したがって、当該製造品1単位当たり費用は、 $(5 \times 2) + (10 \times 4) = 50$  から、 $(5 \times 1) + (10 \times 2) = 25$ へ)。④もし利潤率が一定 (この表では100%で一定) (したがって、当該製造品の価格は、 $(1 + 1) \times 50 = 100$  から、 $(1 + 1) \times 25 = 50$ へ)<sup>(28)</sup>であるならば、支配労働 labour commanded で測られた製造品の価値の変化 (低下) は、体化労働 labour embodied (これが、遂行された生きた労働 live labour performed——うへの、必要労働投入に対応——のことを指そうと、生産の総物的要件 total physical requirements of production——うへの、必要労働投入プラス必要原料投入に対応——のことを指そうと)<sup>(29)</sup>で測られたその製造品の価値の変化に比例するであろう。支配労働と体化労働との両方が半減させられているのである。

オドナーは、「製造品」の労働支配力価値における変化はうへのような形で、その「製造品」の生産条件の変化、技術変化の指標を提供しうることになる (つまり、必要労働投入だけを考える場合でも、あるいはまた必要労働投入プラス必要原料投入を考える場合でも、それらの変化は、労働支配力価値における変化に反映される)<sup>(30)</sup>、とみるのである。そしてまた、オドナーによれば、うへの数字例では、

一定の貨幣賃金ということ（このことは、一定の穀物賃金ということを表している<sup>(31)</sup>）は、生産性（productivity）の向上が製造品を穀物タームでより安価にするということから、製造品に対する労働者たちの支配力上昇ということを含意している<sup>(32)</sup>のであり、そしてこのことが、まさしく、スミスが心に描いていたことである<sup>(33)</sup>、ともされるのである<sup>(34)</sup>。

さらに、オドーネルは、うえのような道筋での労働支配力尺度あるいはまた穀物尺度のスミスによる使用は穀物賃金一定ということだけでなく穀物生産費おおよそ一定ということにも依存しているのであって、このことなくしては、いかなる所与の商品についてもその商品の労働支配力価値（もしくは穀物支配力価値）の変化は、その商品自体の価値の変化だけでなく、穀物の価値の変化をも、反映することになってしまいうる、とするとともに、スミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際の基本的な特徴は、一般に賃金率と利潤率とが所与とされているということであった（うえの数字例では賃金率は5で一定、利潤率は100%で一定<sup>(36)</sup>）、とみつつ、つぎのような指摘をなそうともする。すなわち、うえのような議論に対しては、支配労働価値尺度と体化労働価値尺度との間の比例性（proportionality）は、総価格における労働のシェアが一定であるかぎり、たとえ穀物の価格が変化してしまっていた（それによって貨幣賃金を引き上げてしまっていた——例えば5から10へ——）ときでさえ、維持されうる、といった異議がありうるのである<sup>(37)</sup>が、生産方法の変化と貨幣賃金の変化（穀物の生産費における変化から生じてくる）とがある際に労働のシェアを一定に維持しておくためには、利潤率がある特定の道筋で変化することが必要とされるのであり<sup>(38)</sup>、それに対しスミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際の基本的な特徴は、一般に賃金率と利潤率とが所与とされているということであったのである<sup>(39)</sup>、というのである<sup>(40)</sup>。

（注）

(24) O'Donnell [1990], p. 69 参照。

(25) 以下は、O'Donnell [1990], p. 69 に基づく。

(26) なお、オドーネルによれば、スミスが実際には特定商品の生産に要する労働投入量と他の投入物投入量との比例的減少（あるいは増加）といったことを念頭に置いているように思えるところで彼はしばしば、その商品の生産に要する労働の量の減少（あるいは増加）という形で言及した、とみられ、そして、例えば『国富論』第1篇第11章の「改良の進歩が製造品の真実価格に及ぼす効果」第13パラグラフ（WN, p. 246. 大河内訳〈I〉, 398頁）および第2篇第2章第105パラグラフ（WN, pp. 312-313. 大河内訳〈I〉, 513頁）を見るよう、指示される。（O'Donnell [1990], p. 237n. 6 参照。）

- (27) つまり、他のすべての商品と同様に穀物の価格は（利潤率所与のもとで）生産費によって決定されるのであるが（商品価格＝（1＋利潤率）×商品1単位当たり生産費）、貨幣価値不変のもと、穀物1単位当たり生産費不変のため穀物の〔貨幣〕価格は一定で、そこでの、穀物賃金（貨幣賃金／穀物の〔貨幣〕価格）一定ということは、貨幣賃金一定ということを含意する、というわけであろう。
- (28) 本稿Ⅳの終わりで触れたように、オドナーは、資本主義経済に関するスミスの価格体系を一つの生産価格体系とみ、また、スミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際の基本的特徴は、一般に賃金率と利潤率とが所与とされているということであった、とみていたのであった。
- (29) 本稿注(26)で触れたように、オドナーによれば、スミスは、ある特定の商品の生産に要する労働投入量と他の投入物投入量とが比例的に減少（あるいは増加）しているといったことを念頭に置いていたように思えるときにしばしば、その商品の生産に要する労働の量の減少（あるいは増加）という形で言及していた、とみられていたのであった。
- (30) ただし、オドナーはまた、うへの数字例では銀の価値（貨幣の価値）一定とされているため貨幣価格（money price）における変化（100から50への半減）も生産の困難性における変化（生産条件の変化、技術変化）のはっきりとしたシグナルを提供するゆえに、その数字例そのものはスミスのアプローチの全意味を伝えているというわけではない、ともする（O'Donnell [1990], pp. 237-238n. 7 参照）。
- (31) 穀物価格一定で貨幣賃金一定であれば、穀物賃金一定、というわけであろう。
- (32) 穀物価格一定のもとでの製造品価格低下のゆえに、穀物タームでの製造品価格は低下し、しかも穀物賃金は一定であるため、その賃金の製造品支配力は上昇する（逆に言えば、製造品の労働支配力は低下する）、というわけであろう。
- なお、うへの数字例ではもちろん、製造品生産における生産性向上のゆえに、労働支配力タームでも、支配しうる穀物量タームでも、製造品の価値は、半分に低下する、ということになる。
- (33) オドナーは、スミスがそのようなことを心に描いていたことを示す例として、『国富論』第1篇第8章第35パラグラフ（WN, p. 78. 大河内訳〈Ⅰ〉, 132-133頁）をあげる。
- (34) O'Donnell [1990], p. 69 参照。
- (35) O'Donnell [1990], p. 70 参照。ある所与の商品の穀物支配力価値そのものは、（商品価格）／（穀物価格）によって算出される。そして穀物を含むすべての商品の価格が（利潤率所与のもとで）生産費によって決定され、また穀物1単位当たり生産費一定（穀物生産費一定）、という場合には、穀物価格は一定となり、商品の穀物支配力価値（穀物タームでの商品価値）の変化は、その商品1単位当たり生産費の変化（生産条件の変化、技術変化）を反映しつつその商品の価値の変化を、反映することができる。また、ある所与の商品の

労働支配力価値は、
$$\frac{\text{商品価格}}{\text{貨幣賃金}} = \frac{\text{穀物タームでの商品価格}}{\text{穀物タームでの賃金}} = \frac{\text{商品価格} / \text{穀物価格}}{\text{穀物賃金}}$$
 という形

で捉えることができる。そして、穀物を含むすべての商品の価格が（利潤率所与のもとで）生産費によって決定されるとともに穀物1単位当たり生産費一定（穀物生産費一定）、といった場合には、穀物価格が一定となり、またそれにくわえて穀物賃金も一定であるというときには、商品の労働支配力価値（支配労働タームでの商品価値）の変化は、その商品1単位当たり生産費の変化（生産条件の変化、技術変化）を反映しつつその商品の価値の変化を、反映することができる。ただし、もし穀物生産費が一定でなく可変的であるなら

ば、その変化は穀物価格の変化に表れることとなり、そこでは、ある所与の商品の穀物支配力価値の変化は、必ずしも、その商品自体の生産費の変化（生産条件の変化、技術変化）をそのまま反映してのその商品自体の価値の変化を、そのまま反映するものではなく、また、その商品の労働支配力価値の変化も、たとえ穀物賃金が一定であったとしても、必ずしも、その商品自体の生産費の変化（生産条件の変化、技術変化）をそのまま反映してのその商品自体の価値の変化を、そのまま反映するものではない、ということになる、というわけである。

(36) 表-1の数字例で示されているような関係から言えば、利潤率が一定所与であるがゆえに、例えば、穀物生産費一定という仮定から穀物価格一定ということになっているのであり、また、穀物価格一定のもとでの穀物賃金一定という脈絡で、貨幣賃金(率)一定所与、ということになっているのである。

(37) なお、オドーネルによれば、これが、シロスーラビーニがスミスの尺度の「比例性」という特性（‘proportionality’ property）を表現する方法である、とされる。そしてまた、こういった特性を説明するに際してシロスーラビーニは諸投入物の価格の、賃金、利潤および地代へのスミスの「分解（resolution）」といった考えを使用するのであるがそのようなことは、穀物価格一定という仮定の全重要性を隠してしまうことになるのであって、そのような理由のゆえに、うえの数字例中には原料投入（material input）を含めておいたのである、ともされる。（O’Donnell [1990], p. 238n. 8 参照。）

シロスーラビーニ自身は、スミスは商品価格のうち賃金分け前の占める割合が経時的に安定的といった仮定を明示的な形でなしていたわけではないけれども、その仮定自体は、一国の発展の「前進的」状態において生じることに關するスミスの見解と両立するものであり、さらに、そのような仮定は、近代における——例えば第二次世界大戦に先立つ100年における——賃金シェアの相対的安定性、といったことを説明することを意図された多量の文献ということを考えれば、実際にも、それほど無理なものとは思えない、とみつつ（詳しくは Sylos-Labini [1976], p. 208, 中川 [1995], (下), 578頁, 595-596頁注(21)-注(22), 613頁を見よ）、事実上、スミスの議論における商品価値(相対価格)の「支配労働（labour commanded）」標準での変動と「体化労働（labour embodied）」標準での変動との対応の可能性を概ねつぎのような形で示そうとしていたのであった。すなわち、スミスの場合「全価格（whole price）は、……直接にかまたは究極的に、地代、労働および利潤という……三つの部分に分かれる（resolves itself）」（WN, p. 50. 大河内訳〈I〉, 86頁）のであるから、ある所与の商品の価格  $P$  は、産出1単位当たりのすべての収入の合計とみなされうる。そしていま、 $H$  を当該商品に直接的あるいは間接的に体化された（embodied）労働の時間数、 $W$  を単位時間当たり（1時間当たり）賃金率、 $\delta$  を産出1単位当たり総賃金と価格との比率（ $\delta = \frac{WH}{P}$ , 商品価格のうち賃金分け前の占める割合）、とすれば、（ $P$

と  $W$  の双方を、ある抽象的な紙幣のタームで、あるいは、ある所与の商品のタームで示して、） $WH = \delta P$  といった式を得る。そしていま、当該商品の価値（相対価格）を「支配労働」のタームで表現して二つの異なる期間、期間1と期間2とで比較しようとし、またそこでは期間1と期間2との間での技術進歩のゆえに  $H_2$  が  $H_1$  よりも小さいとする場合、 $\delta_1 = \delta_2$  であるならば、すなわち、賃金となるシェア（価格のうち賃金分け前が占める割合）が変化しなければ、期間1と期間2とに關して、たとえ単位時間当たり（1時間当たり）賃金率  $W$  が変化してしまっていたときでさえ、「体化労働」の比率（ $H_1/H_2$ ）は、「支配労働」の

比率  $\left(\frac{P_1}{W_1} / \frac{P_2}{W_2}\right)$  に等しいということになる  $\left(H_1 = \delta_1 \frac{P_1}{W_1}, H_2 = \delta_2 \frac{P_2}{W_2}, \frac{H_1}{H_2} = \frac{\delta_1(P_1/W_1)}{\delta_2(P_2/W_2)}\right)$  において、 $\delta_1 = \delta_2$  ゆえ、 $\frac{H_1}{H_2} = \frac{P_1}{W_1} / \frac{P_2}{W_2}$  というわけである。(この点に関する議論展開

の詳細については、Sylos-Labini [1976], pp. 206-209, p. 207n. 6, 中川 [1995], (下), 576-578頁, 593-595頁注(12)-注(19), 596-597頁注(23)-注(25), 612-614頁を見よ。) (事实上, シロスーラビーニは, スミスの議論ではこのような意味で, 「支配労働」標準で測定された商品価値の変化は, 当該商品に体化された労働量の変化 (当該商品に直接的あるいは間接的に体化された労働量の変化) を反映することができ, その意味で「支配労働」標準は, 当該商品の生産における「技術変化」の存否およびその程度を反映した形で「価値」(相対価格)の大きさを表示する価値標準となっている, とみていたのである。)

なお, シロスーラビーニに先立って, 例えば M. ドップは上製版刊行1973年の著書 Maurice Dobb, *Theories of Value and Distribution since Adam Smith: Ideology and Economic Theory* (Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1st paperback edition, 1975; ©1973 [first published 1973]) —以下, このペーパー・バック版を Dobb [1973] と略記する—, 岸本重陳訳『価値と分配の理論』[1973年上製版の邦訳] (新評論, 1976年)において, スミスの議論との関連で, 価値尺度としてみた場合の「支配労働 (labour-commanded)」と「体化労働 labour-embodied)」とは, 賃金(部分)が生産された総価値のなかの割合として不変であるとき (賃金(率)の経時的変化が労働生産性の経時的変化と比例しているとき) またそのときにのみ, 同じ結果をもたらす, といった見方とその説明を示そうとしていた。(それについては, Dobb [1973], p. 49, pp. 49-50n. §, 邦訳, 66頁, 330頁注(32), 中川 [1995], (下), 433頁, 435-440頁注(9)-注(10), 441-442頁を見よ。また, 1978年の P. ディーンの著書 Phyllis Deane, *The Evolution of Economic Ideas*, Modern Cambridge Economics [Series] (Cambridge, etc.: Cambridge University Press, 1978) —以下, Deane [1978] と略記する [なお, これには, 奥野正寛訳『経済思想の発展』(岩波現代選書) (岩波書店, 1982年) という邦訳がある] —のなかにも, スミスの議論との関連で, 資本主義経済での価値尺度としての「支配労働 (labour commanded)」と「体化労働 (labour embodied)」といったことに関して, 事实上, それと同様な内容をもった見方が示されている。その点については, Deane [1978], p. 26, p. 26n. 20, 中川 [1995], (下), 652-653頁注(5)を見よ。)

- (38) つまり, 他のすべての商品と同様に穀物の価格は (利潤率所与のもとで) 生産費によって決定され (穀物価格 =  $(1 + \text{利潤率}) \times (\text{穀物生産費})$ , で, 利潤率一定), また, 穀物賃金 (貨幣賃金 / 穀物価格) は一定, という関係から言えば, そこでの貨幣賃金(率)の変化は, 穀物生産費の変化から生じてくる穀物価格の変化に対応するもの, というわけであろう。
- (39) 前出表-1の関係を適用するとすれば, 例えばつぎの表-2のような関係が現れることになるともいえる。

表-2 製造品

	労働投入	貨幣賃金	原料投入	原料価格	費用	利潤率%	価格	労働支配力
期1	2	5	4	10	50	100	100	20
期2	1	10	2	10	30	$\frac{700}{3}$	100	10

つまり、期1と期2との間で、生産費の大きさを決定する項目、必要労働投入、貨幣賃金(率)、必要原料投入、原料投入物価格のうち、生産方法の変化によって表-1におけるのと同様必要労働投入と必要原料投入との両方が半分になり(それぞれ、2から1へ、4から2へ)、同時に、貨幣賃金(率)は2倍になる(5から10へ)、とする。そのときに、商品価格(総価格)のうち賃金分け前の占める割合が不変であるためには、したがってまた、当該商品の生産における1単位当たり必要労働投入(あるいはまた必要労働投入プラス必要原料投入)が半分になるのに対応して当該商品1単位当たり労働支配力が半分になるためには、商品価格がもとのまま(100)、したがって利潤率は上昇(100%から $\frac{700}{3}\%$ へ)、ということが必要となる、というわけである。

- (40) O'Donnell [1990], p. 70 参照。本稿ⅢおよびⅣ中で触れたように、オドーネルは一方で、「短期」と「長期」との間だけでなく「長期」と「発展段階」(もしくは「状態」)との間にも区別をなすスミスの議論においては、一「発展段階」内では生産方法は変化しうるが、賃金、利潤、地代は一定(所与)、穀物賃金は一定(所与)、で、「発展段階」の移行に際してのみ賃金、利潤、地代は変化しうる、穀物賃金は変化しうる、ということになっている、とみるのであるが、スミスが彼の尺度を使用して価格変化についての研究へアプローチする際の基本的特徴そのものは、一般に賃金(率)と利潤(率)とが所与(一定)とされているということであった、とみるのである。(それとの比較で言えば、シロスーラビーニも事実上、スミスの議論では、一発展段階内の長期の諸期間の、一期間ともう一つの期間との間では技術変化は生じうるが賃金、利潤、地代の「自然率」は一定で、発展段階の移行に際して、技術変化だけでなく賃金、利潤、地代の自然率にも変化が生じうる、ということになっている、と捉えていたわけであるが、シロスーラビーニは、スミスの尺度を、賃金率が変化したケースをも扱うものとして論じていたわけでもあるのである。この点との関連では、例えば Sylos-Labini [1976], pp. 208-209, 中川 [1995], (下), 578頁, 595-597頁注(21)-注(24), 613-614頁を見よ。)

〔「V」のつづきおよび「VI」以降については、次稿以下〕